

**第2回 NEO-K 地域ネットワーキングフォーラム**  
**「教師養成・教育現場・社会をつなぐ循環型キャリア形成」**

**日時** 2025年12月13日(土) 13:20-16:40 (ハイブリッド形式)

**会場** AP 東京八重洲

**プログラム**

13:20-13:25 開会のご挨拶 (筑波大学人文社会系 教授 小野正樹)

13:25-13:30 趣旨説明 (筑波大学人文社会系 准教授 文昶允)

**<第1部>**

13:30-15:30 パネルセッション (司会: 筑波大学人文社会系 助教 飯田朋子)

13:30-14:00 「循環型キャリア形成」を支える大学の役割: 変化する時代のキャリア教育と実践的出口支援 筑波大学ヒューマンエンパワーメント推進局  
助教 福嶋美佐子氏

14:00-14:30 「〈養成・研修〉と〈現場〉を結ぶ〔循環〕」が拓く、日本語教師の新たなキャリア インターカルト日本語学校 学校長 加藤早苗氏

14:30-15:00 “日本語教育”で拓くビジネスキャリアー日本語教育は令和型ビジネスパーソンの基礎力になりうるかー株式会社 ワールディング海外人財採用・定着支援部  
課長 絵野沢采子氏

15:10-15:30 登壇者との対話

**<第2部>**

15:40-16:10 グループディスカッション (対面のみ)

16:10-16:30 全体共有

16:30 閉会のご挨拶 (小野正樹)

16:40 終了

**ご報告**

参加者総勢 67 名 (会場 17 名、オンライン 50 名) を得て、盛会に終了いたしました。

第1部フォーラムでは、「大学」「日本語学校」「企業」の立場よりそれぞれご発表がありました。

「大学」の立場からは、筑波大学ヒューマンエンパワーメント推進局 助教 福嶋美佐子氏よりお話がありました。筑波大学ヒューマンエンパワーメント推進局では、留学生を社会へ送り出すために、キャリアを自身の『人生そのもの』ととらえさせ、長期的な人生設計が立てられるよう指導しているとのことでした。筑波大学には 2000 人をこえる留学生が在籍していますが、個々への手厚いサポートを可能にするため、学内におけるさまざまな組織と連携をはかるなどの工夫についてもお話くださいました。

「日本語学校」の立場からは、インターカルト日本語学校 学校長 加藤早苗氏よりお話がありました。「より質の高い日本語教育」を維持していくために、まず日本語教師は「自ら思考する」という営みが必要であり、その理由は、教師の成長は直接的ではなく「往還」(①実践演習・実践研修で「知識」や「型」を学ぶ、②現場実践で「現実の複雑さ」に触れる、③現場研修で「考え直す」、④改善して再び授業へ)によってこそ深まるものだからだそうです。この「往還」を「習慣・文化」にすることで、質の高い日本語教育の維持につながり、「多様な社会ニーズに応えられる日本語教師(=可能性の広い専門職)」となっていくのではないかとお話くださいました。

「企業」の立場からは、日本語を教えた経験や日本語教育を学んだ経験がビジネスキャリアにどのように活かされているのか、株式会社 ワールドینگ海外人財採用・定着支援部 課長 絵野 沢采子氏よりお話がありました。たとえば「ティーチャートーク」は「相手によって話し方を変えるスキル」につながったというご経験、「異文化理解力」は「多様なお客様を受け止められる力」になったという具体的なご経験についてお話くださいました。

第2部グループディスカッションでは、4グループにわかれ、「日本語教育人材の成長や学びにつながっている活動や実践（FDを含むノウハウ）を共有」、さらに「循環型キャリア形成に向けて、参加者それぞれが自身の立場・現場で何ができるのか」について話し合いをしました。以下に一部を共有いたします。

- 小手先の知識が役に立たない不確実性のある現代において、身の回りの現象や物を観察したり分析したりする力が必要となるのではないか
- 未熟であることを自覚する力、もっと良くしていきたいと思う力、「日本語教師×〇〇」という力が必要になってくるのではないか
- 以下のような活動で教師の成長を促進している  
あるテーマを設定→各日本語教師が自身の授業動画を撮影→専任教員（約40名）が見る→フィードバック→改善点を発見→全体で集約し課題発見
- プロジェクト型学習で技能実習の試験合格のための指導をしている
- 留学生に教えるために中小企業診断士の資格をとった
- 教師の評価はどのように決まるのか、評価を受ける場がない
- 頑張った分報酬が返ってくる組みがない

参加者事後アンケートでは、以下のお声を頂戴いたしました。

- ・ キャリア教育、これからの育成就労制度にも掲げられていることだと思いますので、今回学んだ視点を活かしていきたいです。
- ・ 「教案を自分で考えることが、教える力になる。」「学習者からどう見えているかを知る」「現場実戦での失敗で成長する」を胸に刻んで学習者支援に携わっていきたいと思いました。
- ・ ビジネスと日本語教育を、ビジネスの観点からご講演いただき、非常に参考になりました。

ご参加者の皆様に感謝申し上げます。

発表者様方のご厚意により資料を公開しております。

以下のリンクよりアクセスください。

[https://drive.google.com/drive/folders/1tWIP09t3O8kAw1u97S4uU24W\\_-aQh\\_c?usp=sharing](https://drive.google.com/drive/folders/1tWIP09t3O8kAw1u97S4uU24W_-aQh_c?usp=sharing)

## 地域ネットワーキングフォーラムの様子



## お答えできなかったご質問へのご回答

＜第1部＞加藤早苗氏へのご質問

**Q1、加藤先生のおっしゃる循環の中にあった「現場の課題を養成機関にフィードバック」に関心があります。どのような方法があるかを教えてください。**

A1、ご質問ありがとうございました。

まず、フィードバックする内容ですが、これは、成功例ではなく、授業でうまくいかなかった点、学習者の想定外の反応、判断に迷った場面などの省察の共有です。このフィードバックは大がかりな制度というものにはしない、つまり「ダメだったこと」ではなく、「現場に出るとこういうことになる」という先輩から後輩への伝達という位置づけにするのがいいと思います。

教員養成機関側は、それを整理して定期的に勉強会を開いて全体でのディスカッション場面を作ったり、さらにはそれらを教材化、またはプログラム化していけたら…というのは、私自身まだこれからという部分です。

こういったことの循環が自然に行われる中で、教師のキャリアがアップしたり磨かれたりするという事なのではないかなと思っています。

**Q2、反転授業は時間と場所を選ばないため受講者にはいい仕組みですが、一方で先生との対話機会が少なかったり、受講生とのやり取りから学ぶ機会が少なかったりするように思います。その問題の解決はどのようにされていますでしょうか。**

A2、ご質問ありがとうございました。

反転授業についての誤解があるかもしれないので、まずその説明をさせてください。反転授業は対話を減らす授業ではなく、基礎的な知識を事前に学ぶことで、授業時間を教師や学生同士のディスカッションや活動、フィードバックに集中させるための授業形態です。

ですので、大切なのは反転授業そのものではなく、動画等で知識をインプットした後、対話や相互学習といったアウトプットをいかに意図的に組み込めるかというところで、それこそが教師の腕の見せどころだと思っています。

絵野沢采子氏へのご質問

**Q3、将来、留学生が日本語教師になりたい場合、どのような能力を身につけておくべきでしょうか。**

A3、ベトナムで運営している日本語教育機関では、日本の大学に留学していた元留学生の社員が、日本語教師として活躍しています。日本語を第二言語として学んだ方は、自分の学習経験を授業に活かせるという大きな強みがあります。

一方で、彼女たちを見ていると、日本語力や日本での経験によっては、上級レベルやビジネス場面の指導に不安を感じることもあるようです。

そこで大切なのは、「将来、どこで・誰に日本語を教えたいのか」を早いうちから考えておくことだと思います。そのうえで、学習者が日本語で目指していることを、まずは自分自身が経験・達成してみると、より説得力のある魅力的な先生になれるのではないのでしょうか。

たとえば、就労を目指す人に教えたいなら、日本企業で働いてみる。大学進学を目指す人に教えたいなら、日本語で論文を書き、評価を得てみる。こうした経験が、授業の中で大きな力になると考えています。

**Q4、外国人が就職する時にやはり日本語力が必要ということでした。ただ、外国語習得にはどうしても能力差がでてしまうのが現実だと思います。拙い日本語でも、日本人とコミュニケーションをとろうとする姿勢や、相手に配慮する姿勢なども必要で、そういうことを日本語でどう話すかの練習も必要だと思います。みんなの日本語だけではコミュニケーション力は上がらないと思います。先生は、日本語研修の時にどんな工夫をされていますか。**

A4、コミュニケーションにおける姿勢や配慮については、まさにおっしゃる通りだと思います。私も、社会言語能力を伸ばせるようなコースデザインを意識していましたが、それ以上に、「明るい声で挨拶する」、「相手の目を見て、うなずきながら話を聞く」といった日本で望ましいとされる振る舞い理解し、習慣化することのほうが、企業の方から高く評価されていたように感じます。これらは教科書に関係なく、日常のやり取りの中で繰り返し伝えていくことになります。毎日厳しく注意ばかりするのは、学習者にも申し訳なく、こちら心苦しく感じることもあります。そのため、開講時に目的を説明し、学習者にも意図を理解してもらったうえで日々少しずつ繰り返すようにしていました。

## 学生たちのレポート

当時参加した筑波大学の学生たちの感想文も以下に掲載しております。

報告者：A

本フォーラムを通して、留学生のキャリア形成には専門性と日本語力の双方が求められること、また日本語教師には実践と結びついた継続的な成長が重要であることを学んだ。さらに、日本語教育と企業・雇用との関係や、異文化理解の必要性についても理解を深めることができた。その中で、私が参加した A グループの議論では、現時点における大学の日本語教師養成支援の不足と、「循環型」日本語教育の実現という二つのポイントが挙げられた。

まず、大学では日本語教師を志す人に対してさまざまな支援が提供されているものの、実践的な指導やキャリア形成支援が十分とは言えないという意見が出された。特に、日本語教師の中には非常勤として働くことを想定している人も多く、その場合、どのようにキャリア形成を支援すべきかが難しいという点が課題として指摘された。また、現在の日本語教師養成では、人的・時間的制約のために理論中心の指導になりがちで、実践面を十分に理解しないまま現場に出てしまう教師がいるという問題も挙げられた。

次に、「循環型」日本語教育についての議論では、自ら日本語教育機関を運営している参加者から具体的な説明があった。「循環型」とは、日本語教育によって生み出された成果を最終的に社会へ還元することを目指す考え方であり、そのため日本語教育は学習者の実生活や将来の目標と結びついている必要があるとされた。具体的には、学習者が将来目指す分野に応じて、「使える日本語」をプロジェクトの達成を通して学ばせる方法が挙げられた。例えば、建築業界を志望する学習者に、実際に「建築会社」を立ち上げるという設定で活動してもらい、その過程で業界に関連する日本語を学ばせるという、いわゆる PBL (Project-Based Learning) 型の教授法が紹介された。このようなアプローチは非常に興味深く、実践的である一方で、実施するためには日本語教師側にも多様な専門的スキルが求められるという点で、現段階では容易に解決できない課題もあると感じた。

以上のように、本日の地域ネットワーキングフォーラムに参加することで、これからの日本語教育と社会との結びつきについて多くの学びを得ることができた。

以上

本フォーラムは、「教師養成・教育現場・社会をつなぐ循環型キャリア形成」をテーマに、講演や登壇者の方々の対話からなる第 1 部と、日本語教育人材の育成についてディスカッションを行う第 2 部で構成されていました。

第 1 部の講演について、まず福嶋先生のお話では、留学生に対するキャリア教育と日本語母語話者である私自身が受けてきたキャリア教育に共通点を感じる一方で、留学生は、大学生が身につける「専門性」だけでなく「日本語」も身につけなければならないという難しさを感じました。これらを共に身につけられるような専門日本語教育について考えていく必要性を改めて実感しました。次の加藤先生のお話では、日本語学校に限らず教育実践の場において、日本語教師がどのように成長できるのかを考えさせられました。特に、教案作成が実践と強く関連している点については、今まで知識としては持っていましたが、お話を聞くことでその重要性を再認識しました。生成 AI が発達する中で「自力で教案を考えること」と「教える力」の結びつきを意識して授業に向き合っていこうと思います。また、教案や授業の振り返りを組織の文化として定着させることの重要性についても深く共感しました。最後の絵野沢様のお話を通して、企業が日本語教育にどう関わるか、また日本語を母語としない方々をどう雇用していくかについて考えました。日本語教育に携わる場合、学習者のニーズに合わせ、企業や就職活動で求められる知識を教師自身も身につけておく必要があると強く感じました。また、それだけではなく、日本語母語話者側にも異文化理解の姿勢が求められていることを認識しました。

第 2 部のディスカッション（B グループ）では、主に日本語教師の評価プロセスの必要性について議論を行いました。教師が長くキャリアを継続し成長するためには、教師同士が学び合い・話し合う場を作り、互いの実践を振り返り知識を交換することが重要です。それと同時に、個人のモチベーション維持のためだけでなく、努力や成果に見合った適切な評価プロセスや報酬といった環境整備が必要であると感じました。B グループには、企業の人事経験者やキャリアコンサルタントの有資格者も参加されており、一般企業では当たり前の評価がなぜ日本語学校では十分に行われないのかというお話もあったように思います。このような多様なバックグラウンドを持つ人々を受け入れられる日本語教師という働き方だからこそ、多様な考えを取り込んで、改善・発展していく必要があると感じました。

以上

報告者：C

今回のプログラムでは、先生や先輩、クラスメートと一緒に、会場の運営出席確認、発言時のマイクの受け渡しなどを担当しました。このような活動に参加するのは初めてでしたが、運営を手伝いながら発表を聴くことができ、とても貴重で有意義な経験だったと感じています。

会場の運営手伝ったり、先生方のご案内を行ったりする中で、自分にはまだ経験が不足しており、より丁寧に礼儀正しいコミュニケーションの取り方を身につける必要があると強く感じました。

また、発表を聴いて特に印象に残ったのは、日本語教育での経験を現在の一般企業での仕事に応用していることや、教育と移民政策が連携していることを知った点だと思います。これまで知らなかった視点に触れることができ、大変勉強になりました。

さらに、ディスカッションを通して、日本語学校の先生、また異なる職種で活躍されている日本語教育関係者の方々から、「留学生が日本語教師を目指す場合、どのような日本語能力が求められるのか」や、「現在の日本語教師の職業的な展望」などについて直接お話をうかがい、強い関心を持つようになりました。

今回のプログラムを通じて、これまで漠然と捉えていた「日本語教育」という職業を、より広い視点から考えるようになり、将来のキャリアを考える上で非常に貴重な経験となりました。

以上

報告者：D

登壇者①：

筑波大学における留学生支援の取り組み、特にキャリア教育と支援の両面からアプローチされている点が素晴らしいと感じました。グローバル企業との連携や、日本語学習支援の充実など、具体的な事例を通して大学の積極的な姿勢が伝わってきました。留学生が日本社会で活躍するために、大学、企業、そして社会全体が連携していくことの重要性を強く感じました。

登壇者②：

日本語教師は語学を教えるだけでなく、異文化理解やコミュニケーション能力を育む役割も担っているという言葉に、日本語教師の可能性を感じました。国内だけでなく海外でも、日本語教育のニーズは多様化しており、日本語教師の活躍の場は広がっています。

登壇者③：

日本語教育の経験が、単なる言語教育の枠を超え、個人のキャリアと社会に多大な影響を与える可能性を秘めていることを改めて認識しました。先生の経験を聞いて、日本語教師という仕事が、単に言語を教えるだけでなく、学習者の人生に深く関わっていると感じました。

以上



今回のフォーラムに、日本語教育に関わる多くの先生方参加しており、大学での教師養成、教育現場での実践、そして社会との繋がりについて様々な発表及び話し合いが行われていた。日本語教師としてのキャリアの形成や教育や社会を結ぶ取り組みについて具体的な事例が紹介された。発表の中で一番印象に残ったのは「人生そのものはキャリアだ」という意見である。

また、グループディスカッションを通して、参加者が自分の立場や経験を共有して日本語教育関係者の観点から日本語教育の課題について話し合った。

初めての参加で緊張もありましたが、日本語教育が教育機関の枠組みだけとどまらず、社会やキャリアとも深くかかわっている分野であることを改めて感じた。様々な立場の先生かたの発表を聞くことで、自分自身の将来や研究テーマについて考える有益な機会になったフォーラムだと感じた。

以上